
一狩り行こうぜ！

大和伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一狩り行こうぜ！

【Nコード】

N3574W

【作者名】

大和伊織

【あらすじ】

駆け出しハンターヒロインが、モンハンの世界観でそれなりに暴れる話です。一応2ndGベースですのでやってない方は意味が分からないかもしれません。やってる方も意味分らないかもしれません。捏造多めというかほぼ捏造です。オリジナルキャラ普通に出できます。何か色々ごめんなさい。

1・あんよは上手

目の前に自分より巨大なものが立ちはだかり、ましてやそれが襲いかかってきたならば、生物本能として逃げるのが当然だ。しかし自分にはそれが出来なかった。自分の職業は、一応ハンターだからである。泣いて帰ったのでは笑ってももらえない。

大丈夫、大丈夫・自分を信じて相手を見据えたが、それはもう見事にあつという間に倒され、振り返った先には、雪山の崖っぷち、あとはどこまでもどこまでも落ちるだけだった。

変な話だが妙にほつとした。もう、こんな恐い化け物に追われることはないのである。これで村に帰って馬鹿にされることはない。

- やーい弱虫ハンター。

- お前なんて蜂も倒せないだろー。

- 胸なしー。

「…胸がないのは関係ないでしょうが!」

あれ。

「…いき、てる?」

目が覚めると自分は小屋にいて、窓の外からは、どこまでも平凡そうな村が広がっていた。

+ 1 . あんよは上手 +

「やー、無事でよかった、ハンターさん」

「災難だったね、あいつにやられるなんて」

「いえ、あの、お構いなく」

言うのは口だけで、忙しく料理を口に運んだりする手が止まらず、人の良さそうな老夫婦は笑っていたが、もう止まるものも止まらなかった。

ここはあのトラウマに残りそうな雪山にほど近い、のどかなポツケ村。雪山で採集していた村人が自分を助けてくれて、おまけに三日三晩怪我の手当をしてくれていたらしい。

「あの…あいつは一体何だったんです？」

そう聞くとトーストにやたら蜂蜜を塗ってくれていた奥さんの手が、ぴたりと止まった。

「…あいつには関わらない方がいいよ。命が惜しかったら止めておきな」

「そうだそうだ。せっかく助かったんだ。そうだ、あんた村はどこだい？よかったら近くまで送ってってやるよ」

「…えーと」

言えない。あいつを倒すまで村に帰るかボケンダラと吐き捨て出てきたなんて絶対言えない。

「…っ…あー、わ、私、その、流浪人ハンターなんで、もしよかったらしばらくこの村にいさせてくれないかなー、なんて。ここの蜂蜜すつごく美味しいし」

いやまだ一口も食べてないけどな、我ながら苦しい言い訳を言うと、奥さんは目を輝かせ、すごい勢いで手を握ってきた。

「ほっ、本当かい！？あんた、やったよ！」

「この村にハンターさんが来た！やった！！さつそく村長さんに知らせなきゃな！！」

「い、いえ、あの、ちよつと！？」

教訓。口は災いの元。

汗をだらだらかきながら、それでも三日三晩もお世話になった老夫婦の期待は裏切られず、おまけに使わない小屋まで頂いてしまい、今更『私弱いんですゴメンぴょん』とも言切れず、重い足を引きずり、村長のところに挨拶に行った。

「…こ…こんにちは」

「よく来たねえ」

なんというか。小柄な老婆といえはそれまでだが、なんだか妙に可愛いフォームだ。こう、こねくり回したい。おまけにさつきから耳を刺激する変な笑い声が麻薬のような中毒性を持っている。

持って帰る、持って帰って家に飾る。そんな危険な発想を抱いてしまいそうになっていると、ふと、村長が顔を上げた。

「強いハンターさんだとか…助かった。これで村も安泰だねえ」

「い、いえ、あのです、ね」

実は超駆け出しでおまけに要らんとところで負けず嫌いなもんであんな強いのにいきなり挑で瞬殺されかけたんですよ。言おうか言うまいか汗をひたすら流していると、細く優しい目が、一瞬強みを帯びた。

「傷はまだ癒えたばかりなんだろう、ゆっくり、優しい依頼からこなしていきなさい。訓練所も初心者コースがあるから。あんたには、ものたりんかもしれんけどねえ」

「え…」

「慣れたら、上級の依頼も受ければいいよ」

この人は。全部見抜いている。

「…が、頑張ります」

「よしよし、いい子だ。初期防具も武器も揃えているからね。好きなものを持っていきなさい」

「はい！」

さて。新しい朝が来た。今日からこの村でのスタートだ。

「やっと起きたか、貧乳」

「…っ、ど、どなたですか」

「ああん？」

その蛍のような光は青年の声で、こちらに向かって光を放ちながら、頭上をぐるぐる飛んでいた。

「まあ、俺様はいわゆるお助けキャラみたいなもんだ。最近は何ゲームが多いからな、ゲーム本体買う前から攻略本買ってんじやねえよ！」

「すいません、何を言ってるのか」

「うるせえ！ほら、とつとと行くぞ！」

「は、はい」

あら。

「…どうした。まさかびびってんじやねえだろうな」

「…歩けません」

「てめえが押してるのは十字キーだボケ！歩くのはその丸ボタンだ、丸！！」

「やー、歩ける歩ける、爽快爽快。じゃあ行こうか！」

「歩けもしなかった奴が張り切ってんじゃねえよ！」
不安だ、光が点滅しながら回っていると、まったく装備せずに出
かけようとしたため、慌ててちよつと巨大になり、彼女の首根っこ
を掴んだ。

2・最強の敵はポポ

「まともに歩けもしねえてめえみたいなヌルハンターは、とりあえず生肉でも持ってこいや」

何やらやたら偉そうな光に導かれ、とりあえず雪山に行くことになった。

「おおお雪山だ雪山…！」

「テンション上がってんじゃねえよ！」

不思議なもので、いくつになっても降りしきる雪には元気が出てくるというものである。無意味に雪に突っ込み転がり回りたいところだが、残念、自分はハンターだ。例えば生肉二つの納品だろうと、気合いを入れてかからなければならぬ。

「って、寒…！」

「馬鹿が、さっさとホットドリンク飲みやがれ！」

「…おおお？」

支給品であるホットドリンク、何やら赤いものがいまいち食欲（飲欲？）をそそられないが、こうして震えていても仕方がない。気合いを入れてせえの、と飲み干すと、何がどういう仕組みか分からないが、あつという間に寒さに強くなった。

「おおお、すごいなこれ！ちよつと！馬鹿売れするよ！」

「てめえの職業を100ぺん言ってみろ」

「…雪国で手売り…雪国で手売り…四本買ったら一本おまけ…」

「そろばんしまえ！どっから持ってきたんだよ！」

危うく商売人魂が産まれるところだった、自分はハンターなのだ。安全なテントと泣く泣く別れ、フィールドへと踊り出た。

「おっ！？」

出てすぐに、思わず支給品の双剣を構える。ちなみなぜ双剣かというと、二本持っていて強そうだからという大変頭が悪い理由だった。剣を構える先には、巨大な象・マンモスに近そうな生き物がいた。

「そいつはポポつつてな、草食だから、まず襲いかかってくることはねえが」

「どらあ！」

「話聞けよてめえ！」

「…は？」

血のしたたる剣を手に、目の前に横たわるポポを見下ろす。確かに襲いかかってくる様子はなかった。先ほどまではあまりの巨大さに驚いたが、こうして横たわっていると、何だか急に愛くるしく見えてきて、途端、一気に申し訳なさが加速した。

「…っ、ご、ごめん、ごめん、ごめんね！！」

「まあ、生肉はそいつからしか剥ぎ取れないんだがな」

「…え、あ、そ、そうなの？じゃあ失礼して…ああ、ポポ消えた！ポポ消えた！」

「馬鹿が、とろとろしてるからだろうが！」

何だか無駄な命を奪ってしまった感じがいなめないが、生きとし生けるものとして、命を頂くのは食物連鎖の定理であり、命のエゴである。話がとても壮大になったが、要するに、任務遂行の為に罪なきポポを狩らなければならない。

「あ、取れた！生肉取れた！」

「よしよくやった！じゃあ応用編行ってみるか。それを焼いてみる」

「え、焼くの？」

「そのままじゃ食べねえだろうが。生肉を焼けば、体力が戻るアイテムが焼きやがる。体力不足はハンターの命取りだ、アイテムが尽きたとき、生肉を取って焼いて食う。これもハンターの基本の一つだ。ほら焼いてみる」

「ああ、この機械か…な、なんか楽しげな音楽が鳴ってきた…あ、い、いい匂い！美味しそう！」

「よし、頃合いになってきたら止める」

「…焦げた」

「焼きすぎだ、てめえ！」

「ああまだ生だ！」

「早すぎなんだよてめえは！」

楽しげな音楽も鬱陶しくなってきた頃、もう情けなくて泣きたくなってきた。ポポを狩るのもすっかり慣れたが、肉を焼くのになんか慣れない。なかなか上手に焼けてくれない。

「うーん、もうちょっとだと思っただけだなあ…」

「は、肉もまともに焼けないようじゃ、嫁にも行けねえな」

「…え、嫁に行けるの私」

「…っ、だ、誰も俺がもらってやるなんて言っただろう！」

「いや誰もそこまで言っただけだよ！？」

「うるせえいいからお前はさっさとポポでも狩ってこいゴラア！」

「あー、やっと焼けた焼けた」

「つたくてめえはよ…」

後ろからポポの気配がするが、向こうが襲ってくるのではないことは知っていた。おお元気に走れよ、なんて手を振っていると、後ろから思い切りどつかれた。

「いったあ！な、何で!？」

「奴らも馬鹿じゃねえんだよ！こつちが襲ってくると思ったら反撃してくるに決まってるだろうが！おら、さつさと立て直せ！」

「いや、だって上手く振り返ることが - あたたたた! - !」

- 力尽きました。

「おおおおおい!!!!!!」

「ポポ恐い…ポポ恐い…ポポ恐い…」

「おい泣くな…とりあえず初心者演習行こうな」

な、と思わず光が優しくしてしまうほど、ハンターはあわれすぎた。もう光には不安しかなかった。大丈夫かこいつ -

恐らくこの世界で最弱であるポポに殺されてしまうハンターは、恐怖のあまり採集クエストにすら躊躇していた。

3・卵一つも楽じゃない

ポポによって力尽きてしまった恐怖が消えず、ハンターはすっかり引き籠もりになり、日々、プーギーと戯れていた。

「ああ可愛い…可愛いなあ、お前は…襲いかかってきたりしないもんなあ」

「どらあ！」

がすっ！

「あいたあ！」

何か責めてきたかと泣きそうに振り返ると、例の光がふよふよと飛んでいた。

「てめえ、狩りにも行かずに何やってんだゴラア！つつか何だよその豚！どつから拾ってきた！元いた場所に返してこい！」

「お前は私のお母さんか！拾ってきたわけじゃないもん！いらないつて言うからもらってきたんだもん！」

「もんじゃねえ、可愛くねえんだよ！肉一枚剥ぎ取るのに死にかける奴が豚なんて飼うんじゃねえよ！つたく…いいからお前はさつさと狩りに行ってこい！お前の使命を忘れたか！？」

「う、う…」

正直、恐い。行きたくない。しかし、自分を助けてくれた村人たちに恩義もある。何より、自分はハンターなのだという米粒ほどの誇りを、かるうじて忘れてなかった。涙をぬぐい、よろよろと立ち上がった。

「でも…剣だと近づかないと、倒せないし…近づくの恐い…」

それでも弱音を吐いてしまうのが情けないが、言ってしまったものは仕方がない。また怒鳴られるかと思ったが、光の向きが少し変わった。彼（多分）なりに顔を上げたらしく、ああ、と呟いた。

「武器を変えてみたらどうだ」

「は？」

光に導かれるまま、武器を色々変えてみた。演習所で変えたい放題なので、試すのは楽だった。

「あの教官のくだらないギャグがいちいちイラつくくるなあ」

「我慢しろ、カ・コンの遊び心だ」

色々試した結果、ライトボウガンにたどり着いた。剣は恐いし、弓も笛も上手いことじゃないし、ヘビーボウガンは扱いづらいし、大剣は重すぎるし、選びに選んだというよりは、消去法といったところだが、それでも、武器が決まるとテンションが上がった。敵を倒さず、ただ武器を試す度にリロードしたという情けない手段だったとしても。

「おおお、格好いいぞ銃！遠い敵にも当たるぞ！」

「弾切れには気をつけろよ。あとガンナーは装備が守備力が弱くなるから気をつけろ」

「おお、草に当たった！」

「だから話聞けよてめえはよ！」

武器も決まり、張り切ってやることにした。クエストはまだ少し恐い為、演習である。

「卵取ってこいって……ここコンビニとかないの？」

「それは言わない約束だ。コンビニとか言うな」

いくら卵を取ってくるだけの演習でも、当然ポポもいるし、武器演習の際に逃げ回った、目つきがやたら恐いギアノスもいる。見慣れた為か会う度叫ぶことはなくなっただが、それでも見る度全力ダッシュする。学んだことがある。ポポは攻撃しなければ攻撃することもないし、ギアノスも逃げ切れればそう恐くはない。

「お、あつたぞ卵…でか」

「落とすなよ、落としたら失敗だ」

分かつてるよ、よいしょっと卵を持ち上げる。思っていた十倍重い。おまけに重すぎて両手が塞がり、歩くのが精一杯で、頼みの銃も構えられない。どの角度もがら空きだ。

「…聞きたくないんだけど、今襲われたら…」

「避ける、逃げる。落としたら失敗だ」

「いやいやいや」

無茶言うなよ、しかしここまで逃げてこられた為か、多少自信はあつた。よいしょよいしょと卵を運び、順調に歩いていったその時だ。

ぴたり、と足が止まった。

世の中には理解出来ない集団行動というのが多々ある。やたらトイレに付き添いを求める女子。やたら一緒に並びたがるカップル。やたら一緒に買い物に行きたがるおばちゃんたち。そして。やたら二匹以上いるギアノス。

寒いのに、汗が出て来たような気がした。目の前のギアノスたちは、まるでこちらを嘲つかのように、鳴いている。こちらもなきそうだった。漢字は違うが。

「き、きたあ！」

「逃げる！」

「…っ、走れない！」

「いいから、避ける！」

「そう言われても…」

走れないことがこんなに遅い、もどかしいと思ったことはなかった。抜け道をなんとか発見し、すぐるように歩くが、結構すぐに後ろからどつかれた。

「いたっ」

ぬるっ。

嫌な感触に立ち上がると、やはりというか何というか、卵が割れていた。黄色い液体が、顔からしたたり落ちてくる。

「おい、大丈夫か!？」

「…っ、ったくよ…なんだってこの寒い中卵取ってきてよ…挙げ句、割られなきゃいけないんだよ、ああ!？」

ハンターが切れた、光が思わず少し退くと、彼女はおもむろに銃を取り出した。

「うな!!」

ズガガガガガ!!

- きしゃあああああ!! -

「卵もう一個あるなら教えてよ…」

「教える前にてめえが銃乱射したんだろうが」

それにしても、光がハンターを見た。あまりの情けなさに怒鳴ってばかりいたが、もしかしたら、こいつは案外、芽が出るかもしれない。

「…?何？」

「何でもねえよ。おら、急げ。てめえの大好きなポプが見てるぜ」

「好きじゃない!美味しくない!美味しくないよ卵も私も!」

それでも、ポプに泣きながら逃げていく、可愛そうな芽ではある

が。納品まであと1フィールドだが、ポポとはあと数センチと迫り、ハンターはまた泣きそうになっていた。

4・最強おとも

「えーと、演習ももう飽きたし、かといってクエストは恐いし、もう私はプーギーのブリーダーになろうと思います」

「てめえの職業を100ペン言ってみろ!!」

「だって…」

潤む目でプーギーを見つめると、プーギーもこちらを見て潤んでいるような気がする。

プーギーや ああプーギーや プーギーや

一句詠んでしまうほどに愛しい。自称お助けキャラの光にでさえどつかれ、ポポにはどつかれ、ギアノスには鼻で笑われ（被害妄想）、もう魂のよりどころがプーギーしかないのである。いつも家で待っていてくれるし、たくさん触ったら、よちよち外までついてきてくれるのである。何度クエストに連れていく、と喚き、光に怒鳴られたか分かったものではない。

プーギーといつまでも戯れていると、ああ、と思い出したように光が呟いた。

「そんなに動物が好きなら、アイル-を雇ったらどうだ」

「アイル-?」

アイル-というのは、この世界観で非常に役に立つ相棒なのだという。猫のような見た目で、というか完全に見た目猫だが、料理をしたり、時には一緒に戦ってくれたりするという。それはそれは頼もしいが、ハンターは何だか渋い顔をしていた。

「私、犬派なんだけど」

「じゃあ、てめえは帰って大神でもやってるや！カ・コンだつて、犬ゲーばっか作ってらんねえんだよ！」

大神を四周している場合ではない、自分はハンターなのだ。まだ自分は信用がおけるハンターではないので、レベルの低いアイル・しか雇えない。何とも世知辛い話である。

なけなしのお金をどうにか捻出し、アイル・を雇い、わくわくで自宅へ帰ってみた。しかしいざ会うとなると、緊張してしまった。

「私、猫語話せないんだけど。語尾ににゃんとか付けた方がいい？」

「妙な喫茶店マニュアルみたいなこと考えなくていい。アイル・は人語を理解するから気にするな。戦えるし、人の言葉も話せる。てめえより優秀かもな」

「うるさい！よ、よし、行くぞ」

せーの、とカーテンを開くと、そこにはアイル・がいた。思っていたより大きいが、猫とあって可愛らしい。これなら、と、ハンターも笑顔になった。光よりほど上手くやっていけるかもしれない。

「よ、よろしくね」

「…………へっ」

貴重な体験をした。猫に小馬鹿にされた。

「こなしたクエスト数、少なすぎるニャ…大丈夫かニャ。まあ、雇ってくれたことには感謝するニャ。まあ、よろしくニャ」

開いた口が塞がらない、ハンターがどたとたと逃げるように光に駆け寄った。

「何あいつ、何あいつ、何あいつ！腹立つ！」

「落ち着け、いきなり懷いてたら攻略し甲斐がねえだろうが！」

「いやこの世界観の目的、狩りだったよね！？何度も復唱させたのあんたじゃん！！」

正直ものすごく連れていきたくなかったが、連れて行けばレベルも上がるし、懐いてくれるという。前者はともかく、後者はとても信じられない。

とりあえずあまり恐くなさそうな採集クエストに連れていくと、度肝を抜かれた。ものすごい機敏な動きでポポやギアノスに立ち向かっていく。度胸が自分の比ではない。

「……………もう、この村のハンター、アイル・でいいんじゃない！？」

「気が合つな、俺もそう思ってたところだ」

「まったく、ご主人様は銃が下手ニヤ」

「…はい、すいません」

猫に頭が上がらない。ポポはともかく、ギアノスは何もしなくても襲ってくるため、果敢に向かうと、アイル・がいつも先に行っていて、早い話が、敵よりもアイル・に当たってしまうのである。猫の叫び声が聞こえる度に、スライディング土下座をしたい気分になる。

「武器変えたらどうかニヤ」

「いや、これでも考えに考えて決めて」

つつても消去法だけど、ハンターが顔を何気なく上げたその時だった。

「どおおおおおおお！！？」

我ながら、褒め称えたいくなるような速さで、別フィールドに転がり逃げる事が出来た。心臓がまだバクバク鳴っている。何だ、今、すごくでかいのがいた。

大丈夫か、と声をかけられ顔を上げると、光が浮いていた。ほっと息を吐けた。

「うん、今、すごい恐いのが見えた気がして」

あれ。

「…あの子は？」

「アイル - か？まだ、元の場所にいるんじゃないのか」

「-っ」

「おい！？」

今になって考えても、どうしてそんなことをしたのか分からない。気がつけば元いた場所まで走り、アイル - の無事を確認すると、そのまま、崖の下めがけて飛び降りた。

この光景をハンターは知っていた。山かと思ってしまっほどの大きな影。雪山。崖。ホットドリンクを誤って二回連続飲んでしまったというのに、血の気が引いてどんどん寒くなっていた。

「てめえは馬鹿の見本市か！アイル - は何度でも蘇るんだよ！それにアイル - はほっといたって、てめえの後をついてくるんだよ、危ないところ戻ったら、結局はアイル - も危険になるんだよボケが！」

「うええええ…」

ごめんなさい、も鼻をすすりながらでは上手く言えなかった。情けなさ過ぎて、逆に言えなかった。光にバスバスと突かれ、あっちも似たような表情をしているんだろうなあと思ったら、やはり、お怒りのようだった。

「まったくだニヤ。ご主人様はまだまだニヤ」

「はい、すいません…」

「…ま、助けに来てくれたことに感謝してやるニヤ」

驚いて顔を上げると、もうアイル - はいなくなっていた。わなわな震えていると、光もテンション高く頭上を飛んでいてくれた。

「デレたー！どうしよう、デレたよ！私、頑張れそうないがす

るよ！」

「よし、その調子で行け！スチルも近いぞ！！」

とりあえず目下の目標。アイル - をデレさせる。ますます狩りとか離れた気がしないではないが、クエストに行くだけまあいいかと、自分が思っている以上にずっと甘くなっていく光であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3574w/>

一狩り行こうぜ！

2011年10月24日00時16分発行